

1984.12

愛鳥教育

NO. 14

愛鳥教育研究会

ごあいさつ

愛鳥週間ポスター審査に当たって

愛鳥教育研究会会長 田村活三

愛鳥教育No.9 に昭和58年度応募の結果、色刷入選作一切の記録を発表していただいております。昭和59年度応募の審査も去る9月20日にいたしました。私はその審査に参加して先づ応募数の非常に多いのに一驚いたしました。

それが何れも力作で、審査の先生方9名と共に厳正に長時間かけて審査を致しました。主催者の側から申しましてほんとにありがたいことです。応募総数小学校13万4千余、中学校2万6千余、高等学校2千6百余、計16万3千余り、こんなに沢山の方々が、少なくとも愛鳥と言う内容をお考えの上努力してポスターを書き上げていられます。

その実績たるや立派なものが沢山あって兄たり難く弟たり難しで、審査も慎重でした。

各児童生徒の皆様は勿論、御指導下さった先生方又ご家庭の父母の皆様にも厚くお礼を申し上げます。多分これを整理発送下さった機関の方々のご努力も、一方ならぬものがありましたでしょう。併せてお礼申し上げます。

この上は愛鳥活動発表会についても尚一層のご指導ご尽力をお願いいたす次第です。愛鳥教育研究会員の増加もよろしくお願いいたします。

目次

愛鳥週間ポスター審査に当たって	田村活三	2
夏期研修会報告—箱根—		4
・箱根の研修会に参加して	桑原俊雄	5
・夏期研修会に参加して	杉田優児	6
・鳥から学ぶこと	長谷川昭雄	7
研修会の内容について	下田澄子	8
愛鳥講座・イカルチドリの観察	下田澄子	9
冬期研修会案内		14

愛鳥教育 No.14

昭和59年12月15日

発行人 田村活三

発行所 愛鳥教育研究会
住所 〒150東京都渋谷区宇田川町37-10
渋谷レジデンシャルオフィス405
(財)日本鳥類保護連盟内

電話 東京03(465)8601
郵便振替 東京2-92041
制作 かなえ書房

夏期研修会報告—箱根—

会員の皆様にご連絡いたしましたように、8月8日～9日にかけて、1泊2日の夏期研修会が開催されました。ここ数年、夏の研修会は奥多摩の御岳山で行っていましたが、「いろいろな場所で研修会を開いて欲しい」という参加者からの希望により、本年は、交通の便も良く手軽に参加できる場所を、ということから検討いたしました結果、この箱根の仙石原に決定いたしました。

今回、研修会に際しいろいろとご協力をいただき、また、仙石原自然観察のガイドをしていただきました、強羅公園々長・田代道彌氏のお話によりますと、「箱根は野鳥の多い所だったのですが、近年はゴルフ場などの大規模な開発によって、種類数にはあまり変化はないが個体数が大変に減っているようです」などと箱根での野鳥の現状について、具体的なお説明をいただきました。しかしながら、8月の上旬という季節的に鳥の少なくなる時期にもかかわらず、道路脇の林ではクロツグミが囀り、ホトトギス・カッコウの鳴き声が響き渡り、気分は最高でした。

翌朝のバード・ウォッチングは、宿泊ホテル周辺の芦ノ湖畔・桃源台において行い、次々と現われる野鳥を観察し、湖畔の湖尻県営キャンプ場内を散策いたしました。

朝食後は、いよいよメインルートの大涌谷から駒ヶ岳へのハイキングを行いました。大涌谷まではロープウェーに乗って箱根の自然を鳥観し、大涌谷から神山、駒ヶ岳へと縦走いたしました。途中、雷雨に見舞われて濡れねずみとなり、非惨なハイキングという結果になりましたが、これもまたよい思い出となったことと思います。

スケジュール表

8月8日PM 1:00	仙石営業所前集合 仙石原自然観察
4:00	箱根レイクホテル着
6:00	夕食
7:30	意見交換会
9:00	就寝
8月9日AM 4:30	起床/早朝バードウォッチング
8:00	朝食
9:00	大涌谷・駒ヶ岳自然観察 (昼食)
PM 2:00	駒ヶ岳頂上にて解散

観察記録

8月8日 仙石原

ヒヨドリ、セグロセキレイ、キジバト、ウグイス、ハシボソガラス、クロツグミ、ツバメ、イカル、アカモズ、ホトトギス、スズメ、キセキレイ、ムクドリ、アオジ、カワセミ、オオヨシキリ、エナガ、シジュウカラ、コゲラ、センダイムシクイ、ホオジロ、オナガ、カッコウ、ノジコ、セッカ、ゴジュウカラ、計26種

8月9日 桃源台、神山～駒ヶ岳

アオゲラ、ハシボソガラス、イカル、コジュケイ、ホオジロ、キジバト、ヒヨドリ、メジロ、ウグイス、シジュウカラ、ホトトギス、ヤマガラ、スズメ、カッコウ、コマドリ、マミジロ、ヒガラ、メボソムシクイ、センダイムシクイ、イワツバメ、アマツバメ 計21種

参加者名簿 (50音順・敬称略)

阿部 英雄 ・ 梅本 登 ・ 片瀬 実
栗原 仁 ・ 栗原 ハマ子 ・ 桑原 俊雄
桑原 義人 ・ 下田 澄子 ・ 杉浦 嘉雄

杉田 優児 ・ 田村 活三 ・ 長谷川昭雄
平田 寛重 ・ 松井 昌子 ・ 宮沢 常則
山本 曜 ・ 山本 幸子 ・ 渡辺 研造
他日本鳥類保護連盟職員 斎藤一紀、手代木大助

「箱根仙石原」の研修会に参加して

滋賀県 桑原 俊雄

「一度是非、関東で行われる探鳥会に参加し、異った地域ですぐれた観察技術にふれたい。」

かねがね そのような願望をもっていた私であったが、8月8日・9日の両日、箱根仙石原、駒ヶ岳で実施された研修会に、折よく暇を得て参加することができ、楽しい2日間を過ごした。

○仙石原の探鳥

連日猛暑続きではあったが、標高6～700mの仙石原はさすがに涼しく感じられ、高校1年生の子どもを連れて、8日午後1時、指定された集合同所……仙石バス営業所前におり立った時は、期待に胸がはずんだ。

参加者は20名、程なく来られた講師の強羅公園園長・田代道彌氏のご案内で、第1日目の仙石原観察会が始まった。途中所々で講師先生の多年にわたるご観察とご研究の一端をお聞きしながら観察できたので、非常に理解しやすかった。

我々が案内された行程は変化に富んだ地形であり、そう遠くまで足を運ばなくても、林からゴルフ場へ、続いてヨシ原あり、湿地や沼があり、草原にはアオジがさえずり、カワセミを何度も見ることが出来る美しい川の流れるというように、そこは色々な種類の野鳥を招くにふさわしい、豊かな自然の宝庫となっている事を痛感した。

特に驚いたのは、出発して間もない林の中で、近くを通る人や車の動きにも、砂を落とす作業場の騒音にも、大して恐れずに何時までも鳴き続けるクロツグミのきれいなさえずりであった。このような事は私達の地域では到底考えられない事であり、仙石原ならではの情景であったと言えよう。

鳴き声についても、何か地域性の違いを感じた。特に「イカル」の声は明確な特徴があり、しばらく耳をすまして聞いていたが、かなりの差を感じた。更にこのごろは幼鳥が飛び回るころであり、鳴き声や姿の判定しにくい個体が何度か目の前に現われた。参加者の一人であった阿部先生にはその都度、特徴をくわしくご説明頂いたので、大いに学習を深めることができたし、その場その場で

の対象物の捉え方は「かくあるべし」とする観察のあるべき姿を身をもって教えられたことは大きな収穫であった。

行程も終わりの頃になって川向うの並木に集まる野鳥の群れに遭遇した。おそらく木の実や昆虫が豊富なのだろう。折よく近くに橋がかけられてあり、かなり接近できた。野鳥のとまっている樹木は比較的木の葉が少なく、鳥の姿が遮蔽されなかったのも幸いして、一行は彼等の動きを追いながらしばらく時を過ごした。ここでは主にエナガ、シジュウカラの群れや、ゴジュウカラ、コゲラなどが見られた。林を過ぎ、住宅地に入った所で見たオナガの姿も関東ならばこそとつくづく思った。

○早朝の観察

桃源台西方の芦ノ湖畔はキャンプ場になっており、早朝でも人の動きは多い。色々な種類の樹木がよく繁茂しており、昆虫や木の実を求めて野鳥が案内人の近くまでやってくるので、よく観察することができた。この鳥があまり人を恐れないのは、この辺の人々の優しい心の反映であろう。

○大涌谷から駒ヶ岳へ

第2日目の行程は駒ヶ岳を中心とした高地での野鳥観察。午前9時、1泊した箱根レイクホテルを出発し、桃源台よりロープウェーに乗って大涌谷には午前10時頃到着。ここから駒ヶ岳まではかなり険阻な山道であり、何度か休憩を取り、喘ぎながら登った。大涌谷を出る頃、ややガスが出たが神山を過ぎる頃から雨になり、ゆっくり自然観察がしていられなくなったのは残念だった。それでも途中の木立にセンダイムシクイを見つけたり、コマドリやさえずりを楽しく聞く事ができた。また、駒ヶ岳頂上付近では恐らくマミジロであろう。「キョロン、キョロン」と一声ずつ区切って鳴く珍しいさえずりも聞くことができた。

ようやく駒ヶ岳山頂駅に着いた時は全身濡れねずみの哀れな姿だった。しかし雨にたたられたとは言え、高地でなければ聞かれない幾つかの珍しい野鳥に出会い、貴重な体験と強い感銘を受けた。

夏期研修会に参加して

学習院初等科 杉田 優児

私自身、愛鳥教育に取り組んでみたいとおもいながら、なかなか実践に移すことができずにおりましたが、先輩の先生方のお話をうかがったり、探鳥の実験を体験してみて、つきまとっていた不安が少し解消したように思います。研修会に参加してよかったと思います。また、自分なりに感じるところがいくつかありましたので、それを述べたいと思います。

おはずかしいことですが、私が鳥について興味を持つようになったのは大学を卒業してから、それもつい最近のことです。きっかけになったのは、日本鳥類保護連盟の新聞広告であり、「庭に小鳥を」の小冊子であり、中坪礼治先生のまとめられた「野鳥の生活」のレコードでした。決して学校の先生の話でもなく、教科書でもありませんでした。考えてみると、学習指導要領には、鳥に関する内容・項目はほとんどありません。従って、これに基づいて作成された教科書に鳥が登場することはまずありませんから、学校の授業で鳥が扱われることはほとんどなかったわけです。指導要領、教科書共に改訂が続けられてはいても、鳥については内容に大きな変化はありません。私は、やはりこの辺が一つの大きな問題ではないかと思えます。いきなり指導要領や教科書を相手にするわけにはいきませんが、愛鳥教育は、児童会や生徒会或いはクラブ活動といった特別教育活動の中だけでなく、授業として、とりわけ理科の授業として展開されるべきだと思います。先日、「生態学をめぐる28章 沼田真編 共立出版」という本の中で、柴田敏隆先生がお書きになられた文章を読む機会がありました。現在の理科教育・理科教師に対する痛烈な批判と提言に勇気づけられ、また、現場の教師の一人として大いに反省させられました。愛鳥教育研究会としても、愛鳥教育を授業としてどのようにあつかったらよいかということの研究していく必要があるのではないかと思います。

それから、野外実習の機会を数多く設けてほしいと思います。愛鳥教育を推し進めていくには、

教師自らが自然や鳥に親しむ意欲と共に、そのための技術と能力とを持たねばなりません。しかし、大方の教師が先ずこの点でつまづいています。これも大きくは教員養成や現職教育の在り方が問題になるわけですが、私たちとしては、当面、愛鳥教育の意義を一人でも多くの先生に知ってもらい、実践の輪を広げていくことが大切だと思います。そのための探鳥会や自然観察会、或いは野外観察のための実技を伴った講座などを愛鳥教育研究会として開催できたらと思います。今回の研修会に参加してこのことを強く感じました。自主開催が当面難しければ、他の団体の活動に愛鳥教育研究会として参加するというのはできないものでしょうか。探鳥会や自然観察会なら新しい人でも気軽に誘い易いし、会員数の拡大にも一役買うのではないかと思います。興味を持っている教師は、かくれてはいても案外いるのではないのでしょうか。

研修会の終わりに理事の下田澄子先生から、私立小学校にも広めてほしいとの依頼を受けました。ちょうど同じ8月の20日から、日本私立小学校連合会（日小連）の全国教員夏期研修会が東京で開催されることになっており、私も参加を予定しておりましたので、理科部会にて愛鳥教育研究会の案内をすることにしました。当日、会誌「愛鳥教育」と案内書・申込書を配布し、簡単な解説をしたところ、自然保護や環境教育の必要性を訴える意見と共に、ぜひ愛鳥教育のテキストを作成してほしいとの意見が出されました。テキストについては、既に日本鳥類保護連盟から「バードウォッチングの本」が出版されていますが、これをもとに教師用指導書や児童用実習の手引きのようなものが作れないものかと思えます。また、実践は特にしていないが鳥には関心があり、子供からもよく質問されるという声が聞かれました。鳥に関心のある教師はいろいろな団体に散らばっているので、それらの団体に個人として、また、時には愛鳥教育研究会として幅広く働きかけていくことが必要ではないかと思いました。

鳥から学ぶこと

東京都世田谷区役所 長谷川 昭雄

バード・ウォッチング、などという、暇がたっぷりあって、特別に野鳥に興味を持っている人たちの娯楽ではないか、などと思う方もいるのではないだろうか。私も、環境保護の仕事に携わらなければ、その程度の理解しかなかったであろう。確かに、鳥を見に行くためなら、家族のことも顧みず、一人で何日も山にこもってしまうことをする人などは、人間より鳥を愛する変わり者、というべきかも知れない。また、はるかかなたにいる鳥の、ちょっとした動きで百発百中、何という名の鳥か当ててしまうという人を見たりすると、自分とは関係ない世界のことと、考えてしまうのも確かである。そんなバード・ウォッチングだけに参加していると、自分もマニアになろうか、と考えるか、自分とは関係ない、と思ってしまうかのいずれかになってしまう。

研修会では、夕食後のミーティングで、参加者同志、意見を交わすことができた。いろいろな意見を聞きながら、この集まりは愛鳥教育を真剣に考える人たちばかりであることに気付かされた。中には、愛鳥教育はマニアをつくるためのものではない、とはっきり言い、関心させてくれる意見もあった。

そう、愛鳥教育はたしかにマニアをつくるものであってはいけない。もし、100種類、200種類の鳥をいつでも見分けることのできるメンバーを養成するのだとしたら、鳥嫌いの人間もたくさん増えてしまうにちがいない。そうではなく、鳥を愛する者を増やしていくことこそ愛鳥教育なのだ。

みんなの意見を聞くと、愛鳥教育の目的は大體二つあるように思える。ひとつは、小さな生命と触れ合うことによって、思いやり、やさしき、いたわり、慈しみ等の心を育てていくことである。鳥の死を見て涙し、鳥への迫害を見て『いじめ』を許さない心を養っていく。そういう役割を、愛鳥教育は果たしていく、というのである。第二は、自然保護を教育していくことである。鳥を愛し、動物を愛し、自然を愛していくことによって、明日

の日の人間社会の環境を豊かにしようというのである。どちらも大切な目的である。

ただ私は、もうひとつのことを考えている。人間が造られて以来、人間は鳥を見ながらたくさんのかことを考え、たくさんのかことを学んできた。例えば、空の鳥を見、(鳥は)種まきも刈り入れもしないのに生かされているのを見て、鳥以上にすぐれているはずの(人間である)自分に、神の厚い守りがあり、生かされている、と知ることそのひとつである。鳥の生態は、知れば知るほど、その創造の不思議を知られるところである。転がる心配のない巣で生まれる卵はまん丸いとか、かわせみの巣造りのものすごさ等は、ミーティングの中で教えられたことであるが、造られたこの世界は本来、精巧にしかもバランス良く存在していたのだなァ、と改めて驚嘆させられた次第である。つまり、鳥自体の様々な事柄から、人間を学んでいくことに、愛鳥教育の目的があっているのではないか、と思うものである。

研修会の内容について

常務理事 下田 澄子

本年度の夏の研修会で、特に課題として感じられたことですが、当研究会主催の研修会に対して、会員から期待される内容には、大きく分けて二つの項目があるということでした。

結局、「愛鳥教育の効果や、その運営については理解できるが、野鳥そのものの分類や生態等について、もっと理解を深めその教材性を具体的なものにしたい」という方々と、「野鳥の分類や生態については、熟知しているが、学校教育の中でそれをどのように取り上げ、位置づけ、指導していくか、また愛鳥教育の意義を更に具体的に解明したい」という方々とに、分かれていたようでした。

そこで、これら二つの内容について、現状から図によって考えますと、二つつなげてひとつのまとまりのある輪になろうかと思われまます。そして円の一点から円周を、右に進んでも、左に進んでも、一周すると元の点にたどりつくように、愛鳥教育の研修は、その状況、実態に応じてこの二つの項目について、どちらからでも体験を積み上げ、究明していきたいと考えます。

今まで毎年、6月はじめに総会を開き、研究発表や講演、意見交換等行い、観察会も致しました。また夏の研修会は、講演、研究発表、話し合い等も致しましたが、どちらかと言えば、観察会が重点になっていました。しかしこれが、季節的に野鳥の種類や数が少なく、十分満足できる運営ができないという主催者側の反省から、本年度は、箱根に場所を変更致しました。

そして参加された方々から「アカモズなどに会えることができ楽しかった」というお話等もありましたが、一方、「探鳥会は、各地域で行えばよい、その方が実際に役立つ、全体会では、もっと愛鳥教育の理念や実践の方法にせまる理論の面を重視してほしい」というご意見が出されました。

私は、これはまことにその通りであると思われました。すでに長い年月、野鳥保護、自然愛護にたずさわってこられた方々の、貴重なご意見であると感じます。

唯、最近愛鳥教育に関係され、まだまだ実際の野外で、専門家の方々のご指導を受けたいということ希望の方々も多く、更に地域によっては、なかなか探鳥会への参加も思うようでないということもありますので、観察会を重点とする研修会も必要と考えられます。愛鳥教育が、交通安全教育や同和教育のように重点的に取り上げられるようになるためには、野鳥と子どもとのふれ合いの場や方法や内容を、より具体化する必要がありますから、教材性の追究が重要な事になります。従って観察会の内容も、方法も、もっともっと研究されなければならないと思っています。

また研修会の通知に、内容が十分に説明されることによって、選択の余地も出てくるというお話もありましたが、今後注意していきたいと考えます。

以上、運営についての貴重な示唆を数々頂きました。今後それらを十分に生かすよう努力してまいりたいと思います。

また来年からは、野鳥とのふれ合いの多い6月に観察会を重点とし、8月は都内で、講演や研究発表、意見交換など中心に行うよう考えたいという案もでていますが、いずれも常務理事会で十分話し合い、できる限り多くの方々のご希望にお答えしたいと考えます。今後共積極的なご参加と、ご意見を、よろしくお願い致します。

尚連盟と共に、愛鳥教育を重視されるよう文部省にお願いする方向で、種々計画され、国会議員に陳情等行われています。今後具体的な内容等その裏付けが必要となりますが、それは当研究会の重要な課題と考えられます。

研究紹介

イカルチドリの観察

鳥取県気高郡鹿野中学校野鳥クラブ

◎1、研究の動機（◎印 生徒の記録通りに記載）

4月のはじめ、私たちがクラブ活動の時間に、近くの川原に出てみると、チドリの鳴く声、飛ぶ姿を観察することができました。図鑑で調べてみると、「イカルチドリ」という鳥で、年中生息することがわかりました。

詩や歌によまれているチドリの仲間が、こんな身近かな所にいたのかと興味がわき、川原にすむこのチドリが、どんな生活をしているのか、特に営巣を中心に調べてみようと思い立ちました。

註 この研究は、鹿野中学校が鳥取県東部地区中学校自然科学研究発表会で研究発表を行ったもので、その要項により紹介致します。なお誌面の都合で、一部略、要訳、技粋などお許しください。

この研究の動機を読みますと、野外で目についた現象に興味を持ち、研究が始められています。この点、これから活動を始めようとされる学校に参考になるよい手だてであると思われる。身近な事実から問題を把握し、克明な観察によって解決していく立場は、科学する基本的な姿勢ですが、問題は、この学校と違って、内部に指導者が得られないという場合です。そこでひとつの提案ですが、学校で野鳥に対する専門的知識や経験が不足の時は、地域の野鳥愛好家や鳥獣保護員などに援助を仰ぐようにされたら如何でしょうか。なお本会会員の場合は、連盟にご相談されれば、その地域の適当な方をご紹介下さると思います（文中の**註**は、筆者の説明・感想など）。

◎2 研究の目的

- A イカルチドリの生息する環境と分布を調べる。
- B イカルチドリの営巣のようすを調べる。

◎3 研究の計画

- A(1) 河川内の川原で、生息する場所と個体数を調べる。
- A(2) 川原以外で確認したら、その場所と個体数と時期を記録する。
- B(1) いつごろ、どんな所に、どんな巣を作るか。
- B(2) 産卵は、何日位の間に、どんな卵を、何個

産むか。

- B(3) 抱卵は、どのようにするか。
- B(4) 抱卵から何日たって、どのようにふ化するか。
- B(5) ふ化してからのヒナの成長と、親子の関係はどうか。

○4 研究上の留意点（○印は要訳、技粋、一部略などあるもの）

- (1) 観察が、営巣に危害を与えないよう注意。
- (2) 鳥の行動を詳しく観察。行動の意味を考える。
- (3) 営巣期と予想される4～6月を重点的に観察（以下イカルチドリをチドリという）。

○5 研究の経過とその結果

A チドリの生息環境と分布

このチドリは「川千鳥」といわれ、「川の中流以上の川原や池のほとりなどで見られる」と図鑑にあるので、河内川流域、河内川流域以外とに区別して調べた。

(1) 河内川流域のチドリ

河内川を、川の形態から、上流、中流、下流に分けた。チドリの最も多いのは、中流の砂れき地で、特に繁殖期には鹿野大橋を中心に上・下流、それぞれ3km位の範囲に集中していた。また、チドリは時に移動するが、上流は鷲峰あたりまでで、下流は河口まで下ることもある。

◎観察例

51.	6.27	古仏谷	↔ ^{2km(上)}	大橋	↔ ^{3km(下)}	土居
			(8羽)		(6羽)	
52.	5.30	小別所	↔ ^{2km(上)}	大橋	↔ ^{3km(下)}	土居
			(6羽)		(10羽)	

(2) 河内川流域以外のチドリ

本校の校舎の前後には、城跡の濠があるが、養魚の管理上、冬は数ヵ月間水を落している。またこの付近には、水田かんがい用の用水池が大小10ヵ所もあるが、多くの池は秋には水を落し、冬まで湿泥池になっている。

チドリは、満水期にはやってこないが、水が

なくなると川原だけでなく、この濠や池に数羽の群れで来てエサを求めます。この他川に近い水田にも時折おりる。

◎観察例

昭和52年1月16日、濠に3羽。3月7日夜8時ごろ川原に近い水田上空を鳴いて飛ぶ。9月20日馬の池に2羽。10月6日大堤に5羽、10月31日山王池に4羽、11月6日大堤に9羽。

なお繁殖期のころ、川原では、セグロセキレイ、ヒバリ、オオヨシキリ、セッカ、キアシシギ、タシギ、アカエリヒレアシシギ、キジなど見られた。また秋・冬期に池では、コサギ、クサシギ、タカブシギ、タシギ。また池に水があると、カモ類、カイツブリ、カワセミなどが見られた。

◎考察

繁殖期のチドリの生息分布が、中流域の鹿野付近に集中しているのは、川原の砂れき地に巣を作ることと関係していると考えられる。

また、鹿野周辺の用水池が、秋・冬期のエサ場として適していると考えられる。

註 自然保護に関心が高い人であれば言うまでもないことですが、実際には、観察のために野鳥の迷惑はかえりみないといったケースがかなりあります。当校ではその点、留意点の第一にその注意を申し合わせています。立派なことと思います。

また、詳しい観察によってその行動の意味を考えようとされている点も、大いに参考にしたいことです。観察の場合、承知していながらともすると、一度や二度の例で結論づけてしまうことがおこりがちですが、多くのデータから結論を出すことが、野外の生物の場合特に必要と考えます。個別で、複雑で、その時その時条件があるということをも十分考慮したいと思います。

B チドリの営巣と産卵、抱卵、ふ化、ふ化後

(1) 巣を作った場所

今年巣作りし、産卵した場所は、11ヵ所確認できた。直径数cmのれきが堆積している川原を

好み、植物の茂っていない裸地で、ある程度小高い場所を選んでいる。また、あまり狭い川原はさけているようである。

◎考察

卵が2～3cmの大きさであるから、同程度の大きさのれきに産卵するのが最も外敵に発見されにくい方法であると考えられる。

植物が茂っていない所を選ぶのは、ヘビなど外敵を早く察知して、守備体制をとるためかと考えられる。

小高い所を選ぶのは、川が増水しても卵が流される心配がないためと考えられる。

(2) 営巣期のなわ張り

営巣場所の間隔は、最長は1,100m、最短は65mであった。なお、同じつがいの親の巣の間隔は短くなっていった。

◎考察

営巣場所の間隔の平均値から、ひとつがいの親のなわ張りは、およそ700m前後と考えられる。また、営巣場所の間隔に相当な違いがあるのは、川原の環境条件の違いによると考えられる。

(3) 巣の形態

直径8cm、深さ1.5cm位の皿状のくぼみを作り、柔らかいような巣材は入れないが、底に5mm前後の小さいれきを敷きつめていた。さらに変わった習性として、産卵した巣の付近に、卵を産みつけない「仮巣」を数ヵ所から十数ヵ所も作っていた。仮巣の多くは産卵前に作り、巣作りの動作は、主に足を使い、時には翼やくちばしを使っていた。

◎考察

柔らかい巣材を使わないのは、後述のようにふ化直後も綿毛でおおわれているからその必要がないためかと考えられる。

仮巣を作る目的は、本当の巣をまぎらわすためなのか、あるいはいくつか作って気の向いたのに産卵するだけなのか、私達にはわからない。

註 今の子どもは、お説教と言っておとなの話を聞こうとしなかったり、読書も一般的に少なくなっています。また、生活のテンポの速さや、テレビなど映像の面白さの中で、深く考えるということが不十分になっています。かつて道徳の研究指定を受けていた時、同時に愛鳥活動を行っていましたが、「野鳥にふれる事によって、そこに子どもが感動したり、深く考えたりできるならば、すばらしい道徳教育の実践になるのではないか」と言われたことがありました。自然の営みを、余り人間に都合のよい解釈をして、子どもにおしつけるようなことはさけるべきですが、子ども自身が自分から感じ取って、考え深さや、秩序や、優しさや感謝の気持などを、多様な自然から学び取れるよう、克明な自然観察をさせたいと考えます。このチドリの行動にも「わからない」と言っていますが、個々にはいろいろな感じるものもあるのではと思います。

(4) 交尾

つがいを作る時期、交尾の時期は十分に調べられなかったが、産卵の時期から考えると3～4月頃につがいはできるようである。

○観察例 チドリのディスプレイと交尾

5月20日午後5時頃、下流域の富吉部落の川原で観察。はじめメスの近くにオスが行き、オスが腹を平らな状態にし、頭を少し下げてメスの気持ちを引きつけるような姿勢をとる。次にオスはメスの正面に行き、そこで今度は両足を交互にすばやくはね上げるような動作を数秒間くり返した。その後オスは、メスの背中に乗り、数秒間交尾した。また、数分後に同じような動作の後2回目の交尾をした。

(5) 産卵の時期

チドリの産卵は、4月上旬～6月上旬の頃が多い。

◎観察例 本年確認した11ヵ所の巣の産卵時期とその後の経過

	場所	発見時卵数 (月/日)	その後の経過 (×印は卵消失)
1	山崎橋下	4/23 1卵	4/29 4卵 5/2 ×
2	出合橋上	4/28 1卵	5/3 4卵 5/28・29ふ化4羽
3	天王橋	4/29 4卵	5/25・26ふ化4羽
4	下宿	5/1 4卵	5/7 ×
5	旧大橋	5/2 4卵	5/13 2卵にへる 5/24 ふ化 2羽
6	出合橋下	5/5 4卵	5/7 3卵にへる 5/29 ×
7	出百姓	5/20 2卵	5/21 3卵 6/11 ×
8	土居下	5/20 1卵	5/25 4卵 5/29 ×
9	山崎橋上	5/21 1卵	5/24 3卵 5/28 ×
10	土居上	5/5 4卵	6/11 ×
11	山崎橋中	6/10 2卵	5/12 3卵 6/22 ×

なお、この4卵を生み続ける日数を調べてみたが、普通1日おきに1卵ずつ産むことがわかった。

卵の観察は、普通1日に朝1回だけであるが産卵日の間隔調査の場合は、朝と夕方の2回調べた。その結果、産卵時刻は普通早朝が考えられる。しかし、1例のみ日中産んだことがわかっている

○(6) 卵の形状

卵の形は図のようで、大きさは約40mm×27mm位である。色は、地色が淡い青色をおびた黄かっ色で、茶かっ色の微小斑が、丸みのある方に多く散布していた。

◎考察

卵の色や斑点は、普通の石ころによく似た保

護色で、外敵から守るために都合がよいと考えられる。なお、産卵順による卵の大きさの差は認められなかった。

○(7) 抱卵中の卵

卵は、とがった方を内側にして花びら状にならべて抱く。色は、日がたつにつれて青味がうすらいでくる。

◎考察

卵のとがった方を内側にすると、すき間が少なく抱卵しやすいと考えられる。また、卵は回転するようであるが、親が故意にするのか偶然なのかかわからない。

○(8) 抱卵する親鳥の行動

ほとんど1日中、1羽(オスかメスか不明)が抱卵しているようで、途中の交代の例がみられなかった。抱卵していない方は、巣の近くにいない場合が多かった。

抱卵中の親鳥は、日中はいつも頭を上げ、眠ったような姿勢を見たことがなかった。特に警戒する時は、頭を高く上げて、時折頭を上下させたりする。また、抱卵姿勢の向きを少しずつ変えることが多い。

抱卵していないチドリの成鳥は、人などが数十mまで近寄ると、いた場所から飛び立って遠くへ逃げるが、抱卵中の親鳥は、まず巣から走り出て10m位離れてから飛び立ち、数十m離れた所に降りて監視する。そして警戒の鳴き声を発しながら空を施回する。

人などが遠くへ去ると、数分以内に巣の近くの10~20mの所に降り、周囲を警戒しながら巣に近付き、やがて抱卵する。

◎考察

1羽の親鳥が、終日エサも取らずに抱卵し続けるとは考えられないから、時に交代するのか、あるいは一時巣を離れるのか、今後の課題にしたい。

抱卵している親鳥が、直接巣の所から飛び立ったり、降りてこないのは、巣を外敵にさとら

れないための警戒心の現れだろうと考えられる。観察のためとは言え、このように不安を与えるようなことは少なくしたい。

○(9) 抱卵中の外敵

卵が奪われる現場は一度も見えていないが、ヘビ、カラス、そして人間が考えられる。

○(10) ヒナの行動範囲と親子関係

㊦ふ化した日と翌日……ヒナは巣から数十cm出たり、帰ったりしている。親鳥は巢内でヒナを暖めていた。

㊧ふ化後3日目……ヒナは巣を出て数mの範囲で行動しはじめる。

㊨ふ化後1週間……ヒナは巣から10m前後の範囲で行動し出す。親の1羽は必ずヒナの近くにおいて監視している。ヒナは親の近くで群がってしきりにエサをあさり、時々親の翼下に抱かれたりしている。外敵が近づくと親は警戒の声を発し、それを合図にヒナは近くの草むらや石のすみに避難し、親鳥は擬傷することが多かった。

※擬傷行動……外敵が巣にある卵やヒナに近づくと、親は巣やヒナから走り去って10m位離れ、激しい警戒の声で鳴きながら低空を施回したり、数mの所に降りてきて翼をばたつかせたりして、傷ついたらね(擬傷)をして外敵の注意をひき、卵やヒナを守る。

※チドリの鳴き声……普通の状態の時は、のんびり間をおいて「ピオ、ピオ、ピュイ」。警戒している時は、「ピイツ、ピッピッピッピ」とせわしく騒ぎたてる。

㊩ふ化後2週間……ヒナの行動範囲は100m前後と広がるが、ヒナ同志は大体群れで採餌している。監視役の親鳥は、数mの所で採餌もせずにじっと監視している。この監視役はつがいで交代するようである。

㊪ふ化後3週間……ヒナの行動範囲はあまり変わらないが、ヒナ同志が離れて採餌しだすので、親鳥から数十m離れている場合が

ある。親鳥の擬傷行動は、この頃になるとほとんど見られない。時折ヒナが親鳥に抱かれることがあるが、親子とも立ったままの姿勢で翼の下に抱かれている。

○(11) 縄張り争い

チドリ同志で縄張りを激しく争った例は見えない。他の野鳥が侵入しても争いは少ない。

◎6 今後の課題

今までの観察で、よくわからなかったり不十分な点があるので、私たちは、さらに次の点について観察を継続し、特にチドリの保護の立場から次の3と4に重点をおいて研究を深めたいと考える。

- (1) つがいはいつごろから成立し、仮巢の目的は何か。
- (2) オスとメスをどのように見分けるか。抱卵はどちらが受け持つか。
- (3) 卵を奪う犯人は何ものか。また、それを防ぐ方策はどうしたらよいか。
- (4) 主にチドリは、何をエサとしているか。
- (5) 川原のイカルチドリと、浜辺のシロチドリの生態の違いを比べる。

◎7 終りに

- (1) チドリの観察を通して、親鳥が新しい生命をはぐくむうえに、川原という環境に適応して、人目につかない巢を作り、仮巢を作ったりあるいは擬傷してヒナを守るなど、鳥は鳥なりのすばらしい知恵や工夫をこらして、必死に生きているのだ……、ということ強く感じた。
- (2) ヒナが誕生しても、親がエサを与えないということは、大変冷酷に思えるが、反面、そのことによって、ヒナは生まれた瞬間から自分の力で生きることを、厳しく教えられるのだ……と考えさせられた。
- (3) 頻繁に巢に近づいて詳しく観察したいという気持ちと、一方ではそうすることが、警戒しながら育てている野鳥に迷惑を与え、さらに卵が奪われる原因にもなっていないか

という恐れ……私たちはその板ばさみに悩んでできた。

註 このレポートには、研究のまとめを箇条書きで書かれてありますが、誌面の都合で割愛させて頂きました。それはひとつには、研究経過にのせられている内容でもありましたし、何よりも今回は、どんな風に活動が進められたかということに重点をおいてみたからです。

この研究が参考となって、地域の野鳥の詳細な観察から、野鳥についての理解が深まり、より多くの保護の手がさしのべられるようになることを願っています。従って観察に当って、野鳥にあまり不安を与えて、営巣放棄など起らないよう、特に注意して頂きたいと考えます。例えば、卵に直接手をふれたり、計測したりなどの気持が起っても、野鳥の身になって考え、手を出さないよう注意してください。また抱卵中の親鳥をおどろかすような観察の仕方もしひさけて欲しいのです。

そしてそのような基本的なことをふまえて、さらに詳しい観察が望まれるのですから、その方法についての工夫が、大切な研究内容と言えます。

どんな時に、どのようなやり方で、野鳥や巣を観察したらよいか、してはならないことはどんなことか、野鳥の身になって考えたいと思います。「野鳥に親しみ、知り、守る」活動の方法を一層具体的なものにしたいと考えます。

終わりに鹿野中学校のみなさんに厚くお礼申し上げます。
(常務理事・下田澄子)

冬期研修会のご案内

恒例の冬期研修会を下記のように実施いたします。今までは行徳野鳥観察舎と不忍池で行われましたので、今回は都心のオアシス、野鳥の宝庫といわれている明治神宮で開催いたします。行徳や不忍池での研修会では、バード・ウォッチングと室内での話し合いがりましたが、明治神宮には講義室などの施設がありませんので、野外でのバード・ウォッチングだけとなります。

そこで、各自昼食をご持参していただき、室外でお弁当を食べながら話し合いなど行い、会員相互の交流を深めたいと思います。観察できる鳥はオシドリ、マガモ、カイツブリ、シジュウカラ、ヤマガラ、アオジ、メジロ、シメ、ツグミ、カワ

おわびと訂正

前号の「愛鳥教育No.13」で掲載いたしました会員名簿に多くの間違いがありました。ここにおわび申し上げますとともに訂正させていただきます。

誤	正
<北海道> 柳沢 信雄 大滝 知美 札幌市南区南沢5条4 市立東園小学校	柳沢 信雄(理事) 札幌市南区南沢5条4丁 目4-1 市立東光小学校
北村 孝悦 札幌市東区伏古9条2 市立東園小学校	札幌市東区伏古9条2丁 目4-1 市立東光小学校
関根 禎典 札幌市東区北23条東12 松岡マンションB101	札幌市北区北31条西12丁 目北31条パークマンシ ョン503号
梅木 賢俊 〒061-24 Tel 011-082-8639	〒087 Tel 01532-2-2746
深川緑少年団 深川市6条8-6 香川貞雄方 Tel 0166-51-0232	深川市2条20番15号 木村芳美方 Tel 0166-28-7812
<宮城県> 中野小学校 仙台市中野字西152	仙台市中野字西原152
<山形県> 町立北部中学校 〒999-24 Tel 02386-2-2563	〒999-14 Tel 02386-7-2024
町立立木小学校 西村山郡朝日町立木石 岡市 市立西山形小学校 山形市柏倉串間市	町立立木小学校愛鳥教育 担当者 西村山郡朝日町立木315 山形市柏倉888

セミなどです。

皆様のご参加お待ちしております。

記

日時：1月27日(日)午前9:30~午後2:00

集合：午前9:30 明治神宮・南参道鳥居下

(山手線原宿駅より徒歩1分)

費用：明治神宮御苑入苑料1人300円

申込・問合せ：日本鳥類保護連盟内愛鳥教育研究会

会費納入のお願い

愛鳥教育研究会の会費は、4月から翌年の3月までの1年間で年額2,000円です。昭和59年度またはそれ以前の会費を未納の方には、その旨ご連絡をいたしておりますので、会費をご送金くださいますようお願い申し上げます。

<栃木県>

鈴木 貢四郎

那須郡黒羽町大字黒羽

那須郡黒羽町田町66-5

田町66-5

千極小学校児童会

千本小学校児童会(理事)

<群馬県>

古屋住住友

古屋 住友

田島 健一(理事)

田島 儀一(理事)

<埼玉県>

小林 五郎

入間市新久866

入間市新久866-191-12
151

町田 たか子

大里郡寄井町大字折原

大里郡寄居町大字折原10

1093

93

花園町立花園小学校

寄居町男衾小学校

水野 和子

深谷市大字人見1518-1

深谷市大字人見1518-1

<千葉県>

中野 憲明

東那大学職員

東邦大学職員

吉田 重男(理事)

吉田 重男(監事)

中山辰夫

松戸市新松戸5-1 中央

松戸市新松戸5-1 中央パ

110-17D-116

ークD-116

<東京都>

横溝 十重

大田区北千束2-池上1-

大田区池上1-27-11

27-11

千羽 晋示

国立博物館附属自然教

千羽 晋示(理事)

育園

国立科学博物館附属自然

杉田 優児

Tel 03-460-2698

Tel 03-423-0354

石堂 正行

〒119 日野市東豊田

〒112 文京区小日向2-

2-34-2 若宮荘2号

27-15

Tel 03-941-2235

佐伯 彰光 〒152 目黒区大岡山 2-7-12	〒227 横浜市緑区霧が 丘3-22-5グリーンタウン5 -405	＜取鳥県＞ 細谷 賢明 谷口 勝正 鳥取市岡温泉町789-1	細谷 賢明（副会長） 鳥取市吉岡温泉町789-1
金井 郁夫 八王子市中野町4-26-3	八王子市中野上町4-26-3	＜鳥根県＞ 町立吾郷小学校 邑智郡邑智町築瀬	邑智郡邑智町築瀬
浅沼 和男 木下 守 Tel 0425-96-0266	浅沼 和男（理事） 木下 守（理事） Tel 0425-59-5920	＜岡山県＞ 神原 英樹 馬屋小学校	馬屋上小学校
柴田 敏隆（理事） 〒150 渋谷区南平台 町8-20 Tel 03-461-4259	〒270-11 我孫子市高野 山字堤根115 Tel 0471-82-1101	＜広島県＞ 小川 光昭 口和町立口和中学校 藤岡 好子	市立庄原中学校 藤岡 好子（理事） 市立長松小学校
石橋 寿春（理事）	石橋 寿春（常務理事） 区立船橋小学校		
杉浦 嘉雄 ハイツ福家 ＜神奈川県＞	ハイツ福屋	＜香川県＞ 町立多和小学校 Tel 08795-6-2000	Tel 08795-6-2002
三枝 秀明 横浜市港北区仲手原2- 38-14 Tel 045-421-6375	横浜市港北区仲手原2-38 -14 Tel 045-421-6357	＜徳島県＞ 武内 恵行 麻植郡那川島町大字桑 村756	麻植郡那川島町大字桑村75 6
遠藤 豊治（理事） 秦野市文教町1-5 平田 寛重（理事）	秦野市文京町1-5 平田 寛重（常務理事）	＜福岡県＞ 定直 暢夫 福岡市中央区六本松2 丁目2-30-201	福岡市中央区草香江2丁 目1-40-307 Tel 092-761-8789
＜富山県＞ 町立城端小学校 〒93-018	〒939-18	＜熊本県＞ 田中 忠 Tel 0965-43-0178	Tel 0963-43-0178
町立音川小学校 婦中町外輪野5959	婦中郡婦中町外輪野5959	吉島 幸吉 熊本市池田33-26	熊本市池田3-3-26
＜石川県＞ 島根 律子 輪島市鳳至町下町9	輪島市鳳至町91-4	小西 仁 熊本市武蔵ヶ岡1丁目 427-1	熊本市武蔵ヶ丘1丁目42 7-1
＜山梨県＞ 山川 孝次市	市川 孝次	波野村立野小学校 Tel 09674-2032	村立小池野小学校 Tel 096724-2032
＜長野県＞ 伊藤 稜威保 須坂市立森上小学校	市立西部中学校	徳光 金二 市立松尾西小学校 熊本市松尾町松尾4456 -1	徳満 金二 熊本市松尾町上松尾4456 -1
＜岐阜県＞ 宮崎 惇 Tel 05838-8-1920	Tel 05838-9-1920	＜大分県＞ 武石 千雄	武石 千雄（理事）
＜静岡県＞ 大石 齋 小笠郡東町大坂1429-1	小笠郡大東町大坂1429-1		
馬塚 丈司 〒431 浜松市中部町2011-1	〒431-31 浜松市中郡町2011-1	追加 ＜千葉県＞ 蛸谷 米司（顧問） 〒277 柏市松葉町7-15 -18 Tel 0471-33-7860	削除 ＜北海道＞ 和田 淳 ＜東京都＞ 日本教育新聞社 青柳 昌宏 ＜広島県＞ 蛸谷 米司
西村 健一 ＜愛知県＞ 渥美 守久 市立三谷小学校	西村 健一（理事） 渥美 守久（理事） 市立三谷中学校	栗原 仁 〒197 福生市福生1075 Tel 0425-51-9316 市立福生第五小学校 那須智加子 〒121 足立区梅島3- 37-4 区立梅島第一小学校 興石 吉寛（常務理事） 〒157 世田谷区砧3-29 -14 区立松丘小学校	
森本 修 瀬戸市版幡町78 形原北小学校愛鳥育教当 者 蒲郡市金平町屋敷敷田 1	瀬戸市幡野町78 竹内 浩（副会長） 蒲郡市金平町屋敷田1 形原北小学校		
＜滋賀県＞ 桑原 俊雄 新旭町熊野本1211	高島郡新旭町熊野本1211		
＜京都府＞ 福田 博吉 枚方市立桜丘小学校	枚方市立磯島小学校		